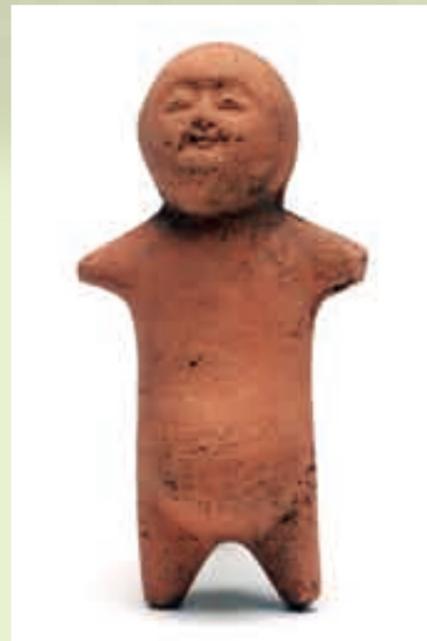
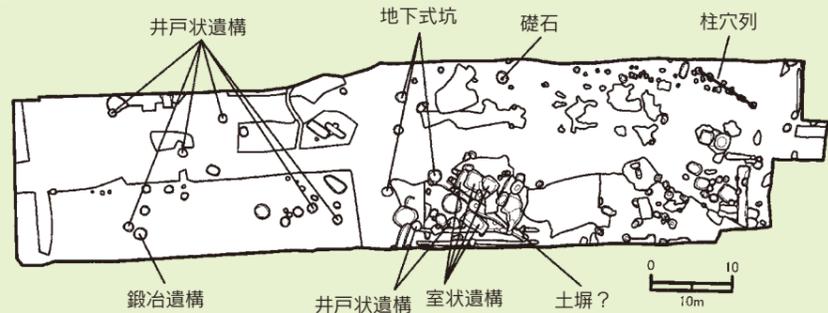


佐倉藩上級家臣団の生活を探る

—佐倉中学校（第5次）発掘調査の成果から—



幼児形土人形
(江戸在地系? : 18世紀後半頃)



佐倉中学校（第5次）調査地区全体図

佐倉城は、広範な下総台地を治めるために、徳川家康の命を受けた土井利勝（初代佐倉藩主）が1617（元和3）年に約5年の歳月をかけて築城し、以後1871（明治4）年の廃藩に至るまで、佐倉藩11万石の政治経済の中心地となりました。現在佐倉中学校の敷地となっている部分は、かつて上級家臣団の武家屋敷が建ち並んでいた場所で、発掘調査は校舎の建て替えに伴い、平成19年4月18日～7月30日の期間に実施しました。その結果、武家屋敷の施設に伴うと見られる井戸状遺構・地下式坑・室状遺構などが検出され、遺構からは近世遺物が多量に出土しました。それらの出土遺物については、今後の整理作業を待たなければなりません。日常生活用具としての碗や皿・鉢・壺・甕・鍋・銚子・蓋物・段重・徳利・土瓶などをはじめ、油皿・ひょうそくなどの灯火具類、お神酒徳利・仏飯器・花生・香炉などの仏神具類、硯・水滴などの机上文具類、土人形・鳩笛などの玩具類、鳥餌入れや碁石などの娯楽品類、簪などの装身具類、煙管などの嗜好具類、刀子・包丁などの鉄製品類、そして建物に関する瓦・鉄製建物部材類など、「武家屋敷」で生活を営んでいた人々の様々な情報を得ることができました。概観ですが、遺物の中心時期は後期堀田時代（1746～1871年）にあるようです。



佐倉城跡位置図 (S=1/25,000)
(赤丸は調査地点)



白磁唐子形水滴
(肥前系 : 18世紀後半～幕末頃)



佐倉中学校（第5次）調査で出土した近世遺物
(出土遺物のほんの一部です)



土製鳩笛 (左) : 陶製鳩笛 (右)
(産地不明 : 18世紀後半頃)



青銅製京風簪(かんざし)
(18世紀～19世紀前半頃)



銀製煙管(きせる)吸口
(19世紀前半～幕末頃)



焼塩壺

鍛冶遺構から出土した近世遺物



「泉湊伊織」銘の焼塩壺
焼塩壺は焼塩を入れた容器で、泉州大島郡湊村（現在の大阪府堺市周辺）を生産地とします。東京湾塩田地帯をよそに、なぜ佐倉の地に「入れ物」が到達したのでしょうか。（18世紀中葉～後期：鍛冶遺構右端に出土している遺物です。）



朱書磁器（端反碗）
(瀬戸系 : 19世紀前半～幕末頃)
「竹内」「竹田」とも読めるこの碗は、焼継ぎの依頼主と見られ、「竹内」であれば「佐倉城絵図」（文化文政年間 1804年～1829年）にある「竹内弥次エ門」屋敷の主に一致します。



江戸のリサイクル事情

寛政年間〔1789年～1800年〕頃、買い替えるより安い値段で仕事を請け負う「焼継師」が登場します。焼継ぎの技法は、白玉粉（鉛ガラス）を継ぎ目につけて、低温度で焼いて接合する方法です。上の写真のように、バラバラになった鉢も見事に再利用されています。